愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学　第29巻　第2号　49～65　1997

中国人日本留学史考

―― 日本留学開始100周年に当って ――

小　林　文　男
（社会・歴史）

プロローグ

本年（1996）は，中国が日本へ留学生を派遣して100年目に当たる。1896年5月（清光緒22年，明治29年），時の清朝政府は官費留学生13名を初めて日本に派遣した。派遣目的は日本語・日本事情習得，派遣先は東京高等師範学校（校長嘉納治五郎）であった。中国がそれまで「東夷の小国」と蔑視し，「自国の属国」視していた日本に留学生を派遣するようになったのはなぜか，それは前年に終結した日清戦争の敗北によって日本への眼が変化したからであるが，同時に，日本政学界の熱心な中国政府（当時は清朝）への働きかけによるものであった。

たとえば，当時，駐清国公使であった矢野文雄は中国政府に対して「わが国政府は中国と増々友誼を敦くせんと欲す。中国は人材を需むること，甚だ急なりと聞く。もし学生を選派し，出洋習学せしむればわが国に於いてその経費を支出せん。……人数は二百人以内に限る」[1] と申し入れている。また上田萬年（当時文部省専門学務局長兼東京帝国大学教授）は清国留学生の受け入れは「日清提携の一致の上にも，与りて大いに力あるもの」[2] と述べた。日清戦争によって多大な軍事費を支出し，あまつさえ敗北による莫大な賠償金を支払い，財政危機に陥っていた中国が，この日本の申し出を歓迎しないわけはなかった。こうして，13名の中国青年は初めてかつての「東夷」の地を踏んだわけである。維新から数えて29年後，明治政府が中国と正式に国交を樹立して25年後のことであった。記念すべき13人の氏名を下記に掲げておく。[3]

唐寶鍔，朱忠光，胡宗瀛，戢翼暈，呂烈煌，馮漠，金維新，劉麟，韓壽南，李清澄，王姓二名，趙姓一名（いずれも名不詳）。

そして以後，20世紀に入るや1901年には280余人，1902年500人，1903年1000人，1904年1300人と鰻のぼりに増加し，1905年には8000人以上に達し，1910年代には平均して年4000人～5000人を上下するまでになった。この傾向は1937年，日中全面戦争が開始されるまで継続した。中国の歴史始まって以来，空前の出来事と言わねばならない。

それだけに問題は，かくも多くの中国の青年がなぜに日本への留学を希望したのか，また日本が中国留学生の受け入れにかくも熱心であったのはいかなる理由によるのか，ということであろう。おそらくこの解明からは，当時の中国が日本をいかに見ていたのか，留学生派遣に至るまでの彼我の関係と背景，言い替えれば，当時の日中関係がいかなるものであったかが判明するだけでなく，この時期，留学生たちが日本から何を学び，それはその後の中国の近代化にとっていか

なる作用を果たしたのか，という問題の解明にもつながるであろう。本稿は，そのことを意図している。

I　日清修好と中国の日本観

近代の日中関係は，1871年（明治4年）の「日中修好条規」の締結に始まる。この修好条規には，「両国好ミヲ通セシ上ハ必ズ相関切ス若シ他国ヨリ不公及ヒ軽藐スル事アル時其ノ知セヲ為サハ何レモ互ニ相助ケ或ハ中ニ入リ程克ク取扱ヒ友誼ヲ敦クスヘシ」とあり（第2条），今日の言葉で言えば，“友好”と“信義”が約されていた。

日本から初代駐清公使柳原前光が清国に赴任したのが1874年，初代駐日清国公使何如璋の来日が4年後の1877年である。[4] 何如璋の一行には，後述する『日本国志』の著者黄遵憲を始め優れた文人・学者が多く加わっていた。わが国官民は挙げてこれを歓迎し，何如璋をして「蓋し其の国慶賀の礼東道の意殊に拳々念ふ可き也」と言わしめたほどであった。日本の第一印象は悪くなかったと言うべきであろう。

こうして始まった日中修好関係であるが，しかし，中国の日本に対する態度は，基本的には“友好”でもなければ，好意的でもなかった。なぜなら，当時，日中間には琉球帰属問題が介在しており，朝鮮をめぐる対立がやっと解決したとはいえ，そのいずれもが中国に不利に作用していたからである。琉球帰属問題とは，維新まもない日本政府が1872年に琉球王国を廃して琉球藩とし，ついで1879年にはこれを沖縄県として，一方的に日本に帰属させたことに対し，中国が「琉球王国は明朝以来中華の冊封を受けていた」ことを理由に強く抗議していたことをいう。当然，大きな外交問題となり，米国が調停に乗り出したり，日本が提案した「琉球日清二分案」等の解決策が講じられたりしたが，いずれも中国の容れるところとならず，結局ウヤムヤのうちに日本の琉球支配が進んでいた。

また，朝鮮をめぐる彼我のの対立とは，当時，徹底した攘夷政策を取っていた李朝朝鮮に対して，日本が開国を強要し，かの西郷隆盛の「征韓論」に見られるように武力を以って条約締結を迫るというものであった。朝鮮をして自らの属国と考えていた清朝政府がこれに不満を持たないわけはなく，「征韓論」こそ実行されなかったが，軍艦による軍事的圧力のもと1876年に調印された「日朝修好条約」に日本が「朝鮮国は自主の邦にして」という一文を入れたことは，中国の不信をいやが上にも高めていたと想像される。

加えて，中国は日本を伝統的に「東夷の一小国」と考えており，近代以前においては倭寇等の行状によって日本を好戦国家，日本人を好戦武強な野蛮人と見，これを侮蔑視していたことが挙げられよう。明代に作られた“狡倭”という言葉には，そのことが端的に示されている。もっとも，そこまでいかなくても遣唐使の時代，あるいは鑑真和上の事蹟を知るものにとっては，日本が中国文化圏に属すると認識されていたことは，中国知識人のいわば“常識”であり，たとえば陳倫炯の『東洋記』には日本を評して「王は中国の冠裳を服し，国は中華の文字を習う」とある。いずれにせよ，中国の属国という意識であり，そのような国が維新によって体制改革を断行したといっても，それを以って中国に敵対し，その文化圏から離脱するなど「為し得べくもない」との観念が支配的であった。[5]

したがって，第一印象は悪くなかったとはいえ，前記何如璋が終始日本を対等に見ていないこと，さきの文章にしてもかつての「朝貢国日本」というイメージから決して自由でなかった。彼

は明治維新を「諸国の浮浪群起して之に和し都下を横行す」と評し，廃藩置県を初めとする維新改革を「何ぞ前者拙にして後者工なるや」と痛烈に批判している。

こうした認識はひとり何如璋に限られるものではなく，彼と前後して来日した多くの文人，官僚に共通するものであった。維新後の日本見聞をもとに『日本近事記』を著わした陳基元がそうであり，『日本雑記』『日本瑣志』の著者闕名氏がそうであった。『日本近事記』には，明治維新を評して“纂国”と呼び，旧主を失った遺民は旧を慕って怒りを蓄え，ために社会不安が日本国中に満ち満ちている，と書かれており，『日本雑記』も同様の立場から維新後の日本が財政・民力両面にわたり貧窮化したと指摘，その原因を「漢学を廃し洋学を興した」ことに求めている。「法甚だしく敝ならざれば，軽々しく改むべからず」とは，『日本雑記』中の一文であるが，守旧を旨とする中国文人の変化への対応＝維新の評価がよく表われている。

しかも問題は，これらの人々の明治維新評価が，これだけに終わらなかったことであった。それというのは，前記『日本近事記』においては日本の政情不安に乗じて「これを討つべし」とあることで，「夫れ日本の人，変を望むや久し，臨むに大兵を以てすれば，なんぞ瓦解せざるものあらんや」にまでエスカレートしたことであった。[6] この期の日中関係の焦点はこれであって，修好成ったとはいえ，台湾出兵，琉球問題，朝鮮問題等々，日本に対する積年の恨みと不満は，とうてい消えるものではなかったのである。いわば膺懲の姿勢である。そして，この姿勢が清朝政界内部の姿勢と照応していたものであることは，1880年10月，時の清朝大官張之洞が琉球問題に関連して「日本畏るるに足らず，之を討つべし」と皇帝に奏議し，あからさまな日本敵視を打ち出していたことに良く表われている。張之洞は，つぎのように言ったからである。

……必不復球則撤回使臣閉関絶市日本其貧華市一絶商買立厳修海防静以待之中国的兵力財力縦不勝俄何至不能禦倭哉相待一年日本窮矣。[7]

この意味は，大国ロシアは問題であるとしても小国日本は何ら怖れるべきではなく，日本が琉球を返還しない場合は，使臣を撤回し，関を閉ざして市を絶つならば貧弱な日本は立ちどころに窮し，さすれば中国の兵力・財力はたとえロシアに勝ち得ずとも日本に抗し得ないはずはなく，対峙一年にして日本は敗北すること必定である，というものであった。

この奏議の問題点は，第一に，これが日清修好下においてなされているところにある。曲がりなりにも友好関係にある国を「討つべし」というのは，よほどのことがない限りできないことであるが，張之洞はあえてそれを言ったのである。このことは重ねて言うが，琉球問題が中国にとっていかに“屈辱”として受け止められていたかを窺わせるに，十分なものであろう。と同時に，日本を過小評価し，その伸長と発展を少しも認めようとしない態度には，前述した「東夷の一小国」という認識＝中華意識が強く作用していることも見逃せないであろう。張の奏議は，全文1000字にも満たぬものであるが，日本を評するに“倭”“貧”なる文字が頻出していることに注目しなければならない。

このように見てくると，維新後の日中関係の出発は決して円滑でなかったことが理解でき，相互に不信と疑惑を抱いていたことが分かり，とくに中国においてその傾向が強い。もちろん，日本においても中国を軽視する風潮がなかったわけではないが，それは「脱亜論」のような明確な形を持ったものではなく，蔑視感などではなかった。日清戦争以前においては，日本人の中国観はおしなべて「大国」「眠れる獅子」のそれであり，「日本文化の始祖」であったことはまちがいない。この点で，上記張之洞らと違い，日本の正しい理解に努め，維新の成果と其の政策を積極的に評価し，相互の誤解を解くことで日清の提携を主張しようとした人物がいたことは，この期

の日中両国にとって大きな救いであった。その人物とは，前述の黄遵憲である。[8)]

黄遵憲は広東嘉応の人で初代駐日公使何如璋の随員として来日した。当初，彼もまた漢学衰退の日本の状況を問題にし，漢学が幕末の勤皇倒幕運動に大いに益した点を挙げ，「何ぞ国に負いて之を廃せんと欲するや」と慨嘆している。しかし，彼が何如璋，張之洞らと決定的に異なるのは，傲らず，興せず，日本を自らの国と同格の文化国家として冷静に観察したことであり，明治政府の近代化政策＝欧化政策を「歴史の必然」として評価し，立憲君主制なる政治制度に多大な関心を持ち，日本人の進取性を称賛し，日本発展の原動力をそこに看て取ったところにあった。漢学＝儒学の伝統が否定されたのではなく，日本的に「生きている」ことをも発見している。彼が大著『日本国志』全40巻（1886年）及びその原形ともいうべき『日本雑事詩』全２巻（1879年）において触れているのはすべてこのことであり，中国が日本に学ばなければならぬ要が，これらには強く説かれている。『日本国志』には，こうある。

「吾が得て変革すべからざるは君臣なり，父子なり，夫婦なり，凡て倫常綱紀に関する者は皆是なり，吾が得て改革すべき者は輪舟なり，鉄道なり，電信なり，凡そ以て財に務め，農を訓へ，商を通じ，工を恵むべき者は皆是なり，今の工芸顧みて忽にすべけんや」[9)]

また，日本の学術の盛んなるを見て，つぎのように書いている。

「日本は蕞爾の国のみ，年来発奮自強す，其の学校を見るに門を分ち類を別ち亦駸々乎として富強の勢あり，則ち，即ち謂ふ，格致の学は我が固より有する所に非ず，尚ほ心を降し以て相従ふべしと」[10)]

加えて，黄遵憲の特質は，日中関係について「両大同じく亜西亜にあり，同類同文，当る倚ること輔車の如くあるべし」との見解を保持していたことで，日中関係の現実をつねに憂いていたことであった。くり返すようだが，こうした認識は当時の中国知識人の中では異例と言ってよい。それだけに，彼の著が公刊されるや，中国の文化界に与えた影響は極めて大きく，とくに政界は衝撃をもって受け止めた。後述する康有為，梁啓超ら改革派政治家の行動はこれを機としており，清朝内部の政変の呼び水になった。『日本雑事詩』の中の二，三を掲げておく。

載書新付大司蔵　　載書（じょうやく）新たに大司に付して蔵せしむ
銀漢星槎夜有光　　銀漢星槎　夜　光あり
五色天章雲絢爛　　五色の天章　雲絢爛
争誇皇帝問倭王　　争い誇る　皇帝　倭王に問うを

王臘舊国紀維新　　王臘（うるわし）の旧国　維新を紀し
萬法随風條轉輪　　万法　風（潮流）に随いて転輪す
杼軸雖空衣服燦　　杼軸空しと雖も衣服燦たり
東人贏得似西人　　東人勝ち得たり　西人に似ることを

化書奇器問編新　　化書奇器（がんもく）　新編を問わんとして
航海遥尋鬼谷賢　　海に航して遥かに尋ぬ鬼谷の賢
学得黎健帰善眩　　黎健に学び得て　善眩に帰し
逢人鼓掌快談天　　人に逢えば掌を鼓って快　天を談ず[11)]

文中にある東人とは，日本人のことであり，この詩の大意は，明治維新の成功によって日本は発展し，今は中国と対等になったばかりか，学芸の振興を進めた結果，科学技術は進み，国威も欧米と伍すものとなった，というものである。なお，この時期，中国に紹介されていた日本人の著作は（したがつて，中国人の日本知識は），頼山陽の『日本外史』（1875年，広州），寺門静軒の『江戸繁盛記』他，数点に過ぎなかった。[12)]

Ⅱ　変法派による改革運動と対日政策の転換

このように日清修好から明治中半期にかけて，日中関係はつねに暗雲に覆われ，一触即発の不安定状況にあった。そして，それが反映して中国の対日観は良いものではなく，時として悪意に満ちていた。黄遵憲のような人物は希有な存在であり，少数派であった。清朝内部では張之洞に代表される頑迷保守派が主流を占めており，日本に対して軽侮と反感を持っていた。軽侮も反感も裏を返せば日本の発展に対する妬心であるのだが，それを自覚せず，日本を冷静に観察する眼を養おうとしなかった。まともな日本研究は，黄遵憲以前は皆無と言って過言ではない。黄遵憲の言葉を続ける。彼は固陋にして門を閉ざし，開化を知ろうとしない母国の現状を，痛烈に批判する。

「昔契丹の主言える有り，我は宋国の事に於ては纖悉皆知る，而るに宋人の我国を視る事十重の雲霧を隔つるが如しと，余を以て観るに，日本の士夫の類能く中国の書を読み中国の事を考ふ，而るに中国の士夫は古義を談ずるを好みて足る己，自らを外事に封ずるは意を惜くを屑ぎよしとせず，泰西は論無し，即ち日本は我と僅かに一衣帯水を隔て，撃柝相聞へ，朝発すれば以て夕には至る可きも，亦之を視ること海外三神山の望む可くして即く可からざるが若し」[13)]

しかし，以上のような状況に一大変化が起った。それは，1984年に始まる日清戦争において中国が日本に敗北したことによる。清朝内部は動揺した。いま日清戦争における中国敗北の因を論ずるつもりはないが，一言だけ述べれば，中国の敗因は，第一に日本の力量を甘く見たこと，第二に長きにわたる封建体制の酔夢から覚めなかったこと，第三に科学技術・近代教育の遅れ，であろう。[14)] とくに，第三について言えば，「“甲午戦争”（日清戦争の中国側呼称）は日本の新文化と中国の旧文化の戦いであり，新文化が旧文化に勝利した戦いであった。……そこでの勝敗は，西欧文化受容に対する中日両国の認識と態度の根本的な違いがもたらしたものであり，双方の西方学習に対する姿勢の成否を証明した」と言う中国の学者の説がある。[15)] 日本をかくまで強大にしたもの，それは明治維新による新政＝富国強兵策であり，洋学である――中国はやっとこれに気付いたのであった。保守派に代わり改革＝改良派が台頭したのは理の当然であった。“変法維新運動”の指導者康有為は，その代表的人物であった。

康有為は，弟子梁啓超とともに「戊戌政変」と呼ばれる政治改革運動を行なった人であるが，もともとは若くして『新学偽經考』『孔子改制考』等を著わした学者であった。その彼が，明治維新に倣って国是を定め，中国に立憲君主政体を樹立し，近代化を計ろうとしたのは，直接的には日清戦争の敗北によるものであるが，前述したとおり黄遵憲の書を読んでいたことによる。彼は日本の富強が洋学の摂取と翻訳にあったことに着目し，洋学の輸入には日本書によるのが最も近道であると考え，1896年，梁啓超，黄遵憲の助力を得て『日本書目志』を編纂するとともに，各地に強学会という名称の洋学普及の学校を開設し，主として日本書の翻訳に従事したが，政変

の年，1898年には大著『日本変政考』を完成している。

『日本変政考』の趣旨は，中国がいま富強・革新の道を歩むためには，すべからく明治維新に範を取るべきこと，すなわち1）国是を定め，2）賢才を徴し，3）憲法を制定する，に如かずというもので，「日本の富強はここに由来する」として，明治新政の実態を詳細に分析したものであった。保守派の動揺，改革＝変法派の台頭という状況の中で，この書は前後して上奏された「第六上書」と並んで清帝（徳宗，光緒帝）に取り上げられるところとなり，以後，康有為が政治の前面に出てくるきっかけとなったものである。彼は同書において，つぎのように述べている。

「臣，久しく且つ詳細に日本を考察してきた。先行するものの失敗を見れば，最大の困難を教訓となすことが出来る。もしその成果に学び之を取り入れるなら，強大になる事容易である。大体において欧米は三百年かかり新制度を完成し，日本は欧米を模倣して三十年で之を完成した。もし広大な国土と膨大な民を有する中国が，近き国日本のそれを取り入れるなら三年にして大綱成り，五年にして条理備わり，八年にして成果上がり，十年にして雄図定まるであろう」[16]

また，『広く日本書を訳して遊学を派せんことを請ふ摺』の中では，日本書の組織的，体系的翻訳と日本への留学生派遣の必要性を強く奏議している。日本から中国へではなく，中国から日本へ留学生を派遣するなど，中国においてはかつて予想だに出来ない考えであるだけに，康有為の提言は実に画期的なものだったと想像される。しかも，彼が変法の一つの重要な柱に学制改革と大学（京師大学堂）の設置を挙げていることは，日本富強の基盤に国民教育の普及があったこと，国民の教育水準の高いことを看取していたからに外ならない。京師大学堂は開設され，これは今日の北京大学として受け継がれている。

こうした立場は，弟子梁啓超においてさらに一歩進められていた。というのは，彼には「日本文を学ぶの益を論ず」という一文があるが，その中で梁は，日本における政治学，経済学などいわゆる社会科学の隆盛を称賛し，これら民智を開き，国基を強固にするに有用な学問は，翻訳を待って読むよりも直接日本文によって読む方が確実である，と言い，新学を志す中国人はすべからく日本語を学ぶ必要がある，と説いたからである。康有為と同じく，彼が日本留学の要と益を強く主張したことは，言うまでもない。ちなみに，梁は福沢諭吉に傾倒しており，福沢をつぎのように評価し，紹介している。

「福沢諭吉は明治維新以前にあっては，師から与えられることなく，自ら英文を学び華英辞典を片時も離すことなく勉強した。彼は独力で学校を創設したが，これが慶応義塾である。また，新聞社を経営し，時事新報を発刊した。これらは今日，日本の私立学校及び新聞界で並ぶことのない座を占めるに至った。著書数十種，もっぱら西洋文明思想の輸入を主義としている。日本人の西学との接触は，福沢を始とすると言って良く，維新改革において為した事業は，福沢に問うたところ十中六，七に上ると言う」[17]

このように，康有為，梁啓超ら改革＝変法派の努力によって，事態は以前に比して一変し，中国朝野の日本への関心は大いに高まった。梁によれば，1895年から97年までに，新学の普及と宣伝のために開設された学堂・学会・報館（新聞，雑誌発行所）等の総数は51カ所で，その内訳は学堂19，学会24，報館8に上ったと言い，上海では自ら旬刊紙『時務報』（1896年8月創刊）を発行，主宰している[18]。『時務報』は中国最初の近代的新聞である。福沢の『時事新報』の影響が，ここにも読み取れよう。世論操作は着実に進んだ。

にもかかわらず，康，梁らの意図した政変は成らなかった。前記光緒帝をかついで断行したクー

デターは，清朝の実質的支配者であった西太后を中心とする保守派の巻き返しによって，僅か103日で挫折したからである。1898年８月６日のことで，史上，これを「戊戌政変」と言う。光緒帝は退位させられ，クーデター参加者の多くが処刑，あるいは処断された。康，梁二人は日本に亡命した。黄遵憲は光緒帝により，この年７月，駐日公使に任命されていたのであるが，政変の失敗で拘禁，更迭され，再び日本に相まみえることがなかった。死一等を免れたのは，日本の強い抗議があったからだという。

だが，ひとたび起った日本ブームは，保守，改革その立場の相違を越えて，いまや後戻り出来ないものに，言い替えれば，中国の体制として定着しつつあったことも事実であった。かって罵倒の対象であった西郷隆盛が，一転して“英雄”視されるようになったことなど，その好例であろう。西郷の真実が中国の識者にどの程度まで理解されていたかは不明であるが，政変が失敗に帰した折，変法過激派の譚嗣同が梁啓超に向い，「君は西郷たれ，我は月照たらん」と言い，従容として死におもむいた事実は，明治維新の過程を十分に研究しているのでなければ生まれない気分である。[19]

さらに，以上に増して大きな変化は，「日本討つべし」として憎悪に近い対日感情と態度を保持していた保守派の中心人物張之洞にも，例外なく襲ったことであった。彼は1898年，名著の誉れ高い『勧学篇』を著わしたが，その中で日本留学の必要性をとくに強調し，つぎのように書いたからである。

出洋一年勝於読西書五年此趙營平百聞不如一見之説也入外国学堂一年勝於中国学堂三年此孟子置之莊嶽之説也遊学之益幼童不如通人庶僚不如親貴……至遊学之国西洋不如東洋一路近省費可多遺一去華近易考察一東文近於中文易通暁一西書甚繁凡西学不切要者東人已冊節而酌改之中東情勢風俗相近易棒攸行事半功倍無過於此（外篇第二遊学）[20]。

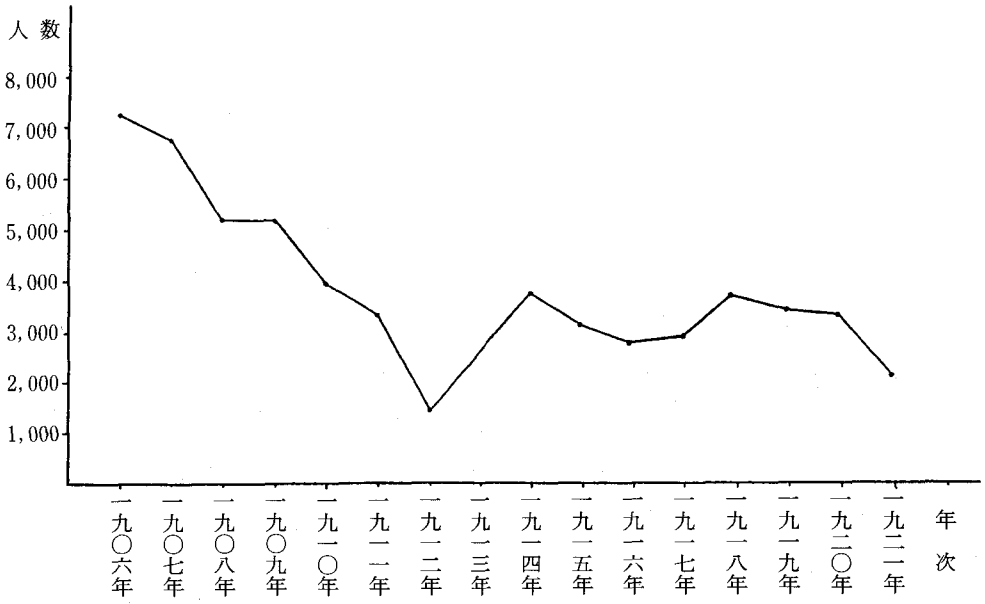
漢文調の日本語に直訳すると，こうである。

「出洋の一年は西書を読むの五年に勝る。此れ趙營平の百聞は一見に如かずの説なり。外国学堂に入るの一年は中国の学堂の三年に勝る。此れ孟子の此れを莊厳に置くの説なり。遊学の益は幼童の通人に如かず，庶僚の親貴に如かず……遊学の因に至りては西洋は東洋に如かず。一，路近くして費を省き，多く残すべし。一，華を去ること近くして考察し易し。一，東文は中文に近く通暁し易し。一，西書甚だ繁にして，凡そ西学の切要なるものは東人すでに册節し，之を酌致す。中東の情勢風俗相近く做行し易く，事半ばにして功倍すること之に過ぐるものなし」

この文章で見る限り，張之洞は日本の学問と教育を大いに評価し，この面では政敵康有為らとほとんど変わらない。彼がその後，劉坤一らと共に中国の学校制度の改革に着手するのもそのためで，1905年に制定された「奏定学堂章程」は日本の明治５年学制をそっくりそのまま模倣したものであった。また，張之洞と同じく保守派の大官であった張謇も，日本人のありようが幼児期の教育によって養われたことにいたく感銘し，以後，日本への関心と理解を深めていった。張謇はその後，企業を興し，中国資本主義のパイオニアとなった人物である。

したがって，政変成らなかったとはいえ，康有為らの努力が決して無駄でなかったことが理解できる。1900年の義和団事件を経て，1904年，日本が日露戦争に勝利するや，「日本に学ばなければならない」とするこの傾向にはさらに拍車がかかり，日本書の翻訳が進み，前述したように日本への留学生が急増するに至ったのである。

第1表　20世紀初頭における中国人日本留学生数の推移



（出所）阿部洋「中国近代における海外留学の展開」（『国立教育研究所紀要』，第94集，1978年3月）

留学生問題については次節に述べるが，日本書の中国訳について言えば，1896年から1905年までに約600種にのぼり，その中には前記福沢諭吉の著書を初め，西郷隆盛，中江兆民，井上哲次郎らが含まれており，社会主義者幸徳秋水のものまでが翻訳されている。つぎに，これら訳書のうち，人文・社会科学関係の主要な著作を掲げておく。[21)]

福沢諭吉；

『訓蒙窮理図解』（台湾総督府民生部学務課訳，1900年）

『文明論概略』（東京訳書編訳，1901年）

『福沢諭吉政権論』（秦元粥訳，明権社，1903年）

『福沢諭吉叢談』（馮霈訳，広智書局，1903年）

『男女交際論』（張肇桐訳，文明書局，1903年）

加藤弘之；

『物競論』（楊蔭杭訳，東京訳書，1901年）

『加藤弘之講演集』（作新社訳，1902年）

『天則百話』（呉建常訳，広智書局，1902年）

『人権新説』（陳尚素訳，開明書店，1903年）

『道徳法律進化之理』（金壽康等訳，広智書局，1902年）

中江兆民；

『革命前法朗西二世紀事』（出洋学生編輯，日本出洋学生編訳所，1901年）

『理学鉤玄』（陳鵬訳，広智書局，1902年）

幸徳秋水；

『二十世紀之怪物：帝国主義』（趙必振訳，1902年）

『社会主義広長舌』（国民叢書社訳，国民叢書社，1902年）
井上哲次郎
『欧米各国政教日記』（林廷玉訳，新民訳印書館，1899年）
『哲学要領』（羅伯雅訳，広智書局，1900年）
『哲学原理』（王学来訳，閩学会，1903年）
『欧美政教紀原』（林廷玉訳，新民訳印書館，1903年）
西郷隆盛；
『西郷南州先生遺訓』（成田安輝訳，1910年以前の刊行は確かだが，詳細不明）

Ⅲ　留日学生の増大とその日本体験・日本観

冒頭で述べたとおり，中国から日本への最初の留学生は，1986年，13名の官費留学生を敲矢とする。現存する資料から推して，彼らの留学期間は原則として3年間であったが，数人が日本語の学習を終えた後，さらに高等教育を受けるため（大学進学）残留している。その後，1900年までにどれほどの数が来日したかは不明であるが，一説では100人前後であったと言われている。それが1902年には前述のように500人，以後，年毎に増加し，1905年には何と8000人に達している。[22)]

この原因は，言うまでもなく中国政府の対日政策の一大転換によるものであり，1901年に制定された「学務綱要」には，科挙の改革と海外留学の促進が謳われているのだが，派遣先としてはとくに日本が，「断じて到らざるべからざる国」と指名されている。しかも，1902年10月，中国政府は汪大燮を「日本遊学生総監督」に任命したが，汪は高位の高官であり，こうした大官を留学生派遣事業に当てたことは，中国にとって日本への留学生派遣がいかに重大事であったかが理解できよう。中国の若者が競って日本へと向かったわけである。ちなみに，汪は清朝最後の駐日公使となる。

しかし，政府の意図に反して，来日した多数の留学生は日本で生活し，その政治，社会，教育，文物，人情に接するうち，民族意識に開眼し，しだいに反体制＝反清朝になっていった。代表的なのが章炳麟，陳天華，秋瑾（女性）らのちに革命家になった人たちがそれであり，1902年に来日し，仙台で学んだ文学者魯迅もその一人であろう。のちの中国首相周恩来，歴史学者で詩人の郭沫若も，この時期の日本留学生であった。

彼らが反体制＝反清朝になった原因は，初期においては前述の梁啓超の影響によるものであり，ついで本国における反清民族革命を目的として動き始めた孫文ら革命派の扇動によるものであったが，同時に，日本においては本国での禁書類が自由に閲読出来たこと，1904年，日本がロシアとの戦争に勝利したこと，日本人の愛国心の強固さに日常的に触れたこと等々が原因になったことも，見逃せないであろう。章炳麟は，こう書いている。

「日本は維新以後，新道徳と旧道徳とを兼ね合わせており，法に従い，節を守ることにおいて，古に優る。先には軽挙好戦の風があったが，ようやく転じて困難に身を捨てるようになった。これは社会道徳が善に進んだことによる。……先には軽挙独善であったが，士人には超脱非凡な者がしばしばいる。中江篤介（兆民），福沢諭吉などの人は東方の師表と仰ぐべきである」

また，日露戦争に日本が勝利したことに関連して，秋瑾と陳天華はそれぞれつぎのように述べ

ている。

「いちばん羨ましく思うのは，子供たちが大きな子も小さな子も，道端に立って手を振ったり，万歳を叫んだりしていたことである。とても愛すべきではないか。本当に羨ましい限りであった。わが中国でいつの日，このような情景があらわれるであろうか。

ああ，皆さん，ごらんのように日本の人はかくも心を合わせ，軍人をこんなにも尊んでいる。……今日，ロシアという大国が小さな三つの島国の日本に敗れたのも，大部分はこのためです」（秋瑾）[24]

「公平に論じて，日本の今度の戦争は東アジアにまったく功績がなかったとはいえない。もし日本の一戦がなければ，中国もすでに瓜分されていたかも知れない。日本の一戦のおかげで中国は生き残れたのだ。堂々たる中国が日本にほごされたと言えば言い過ぎだが，しかし，事実がそうなのだから隠すこともない。これを恥と思うならば，自ら強くなるしかない。外交を利用し，政体を更新し，10年の間に常備軍50万をつくり，海軍を20万トン増強し，鉄道を10万里延ばせば，彼ら（日本）は必ずわれわれと同盟を結ぶだろう。同盟と保護とは同日に語ることは出来ない。保護とは，自分に勢力がなく，まったく人のおかげを受けるもので，朝鮮がそうである」（陳天華）[25]

こうした留学生たちの指向は，やがて日本に孫文を迎えて1905年７月の中国同盟会の成立に結集されるのであるが，総じて彼らの意識は日本との比較において中国の現実を慨嘆し，それを変える必要性を痛切に希求していたことであろう。そして，そのためには清朝を打倒して中華を恢復させる――ここに中国の未来，富強への道を見出したことにある。中国同盟会の誓辞には，そのことがつぎのように高らかに謳われている。

「天に当って誓を発す。韃虜を駆除し，中華を恢復し，民国を創立し，地権を平均す。矢(よ)く信，矢(よ)く忠，始有り卒(おわり)有り。如し或は此に渝(そむ)けば，衆の処罰に任せん」[26]

周知のように，孫文による辛亥革命は日本において構想され，主体は日本留学生であったが，その出発点は以上の同盟会の設立にある。同盟会には，日本に来ていた留学生の多くが参加したと言われ，梁啓超によれば「革党，現在東京にて極大の勢力を占め，万余の学生，これに従う者は過半」（康有為への書信）というものであった。“過半”というのがどれほどの数であるか不明であるが，いずれにせよ，日本は革命のモデルであり，「革命のために日本を学ぶ」という意識に憑かれていた学生が多く存在していたことを思えば，同盟会の成立を契機に彼らが清朝打倒の流れの中に身を投じたことは，まちがいない。

驚きあわてたのは，清朝政府であった。彼らにとってはこのような事態は予想だにしないことであった。清朝政府は，日本政府にその取締り方を要求した。1905年11月，日本政府が「清国留学生取締規則」（文部省令第19号）を公布したのは，このためである。「清国留学生取締規則」第１条には「公立又ハ私立ノ学校ニ於テ清国人ノ入学ヲ許可セントスルトキハ其ノ入学願書ニ本邦所在ノ清国公館ノ紹介書ヲ添付セシムヘシ」とあり，革命運動に参加ないしはその同調者を学校から締め出すことにあった。紹介書とは清朝政府の身元保証書であり，それがない者は入学出来ない，つまりこれの所持如何で反体制か否かを判別するというものであった。しかも，校外生活をも学校の監督下に置くことを規定し（第９条），留学生の行動の自由を奪おうとするものであった。[27]

これに対して，当然のことながら留学生たちは反対運動を展開した。彼らは各地で同盟休校を含む抗議行動を行なっているが，なかでも壮絶を極めたのは前記陳天華が「絶命書」なる遺書を

残して抗議自殺を遂げたことであった。「絶命書」の内容については，後述するが，これを見て多数の学生が憤激して帰国した。秋瑾もその一人で，彼女は日本を離れるに当り，つぎのような離愁の詩を作っている。

光陰を把りて逝く波に付すを忍ぶ
這般の身世　愁いを奈何せん
楚因，相対して無聊極まれり
樽酒悲歌　涕涙多し
祖国の河山　頻りに夢に入る
中原の名士　孰(たれ)か戈を執る
雄心壮志　銷し尽し難く
惹き得たり　旁人の悪魔を笑うを[28)]

取締規則に対して彼女は大きな疑問と憤懣を抱いて帰国したが，しかし，彼女が終生，日本を愛し，日本を忘れなかったことは，常に和服を愛用していたこと，有名な和服を着て匕首を擬している写真によく表れていよう。なお，陳天華の抗議死は取締規則そのものへの反対行動であったと同時に，留学生の抗議行動を朝日新聞が「放縦卑劣」と書いたことに対するものでもあった。

もっとも，この時期，清朝政府も手を拱いてばかりいたわけではない。彼らもそれなりに体制の危機を感じとっていた。反体制化した留学生の動向に対抗して1905年，1300年来続いてきた科挙を廃止する一方で，軍の近代化を図っていた。満州貴族，八旗及び忠臣・良吏の子弟を中心に体制に忠実な青年を厳選して，彼らを国費を持って日本の陸軍士官学校に派遣留学させ，優秀な士官の養成に意を注いでいたのはそのことを示しており，その数は1900年から1913年までに683名に達している。

いうまでもなく，彼らは特別待遇のもと，特別教育を受け，帰国後の昇任・登用が約されていた。そして，彼らが政府の期待に違わなかったことは，帰国後，“保皇尽忠”をモットーに革命派の弾圧にらっ腕を振るったことに良く示されており，たとえば第一期生の鉄良，第二期生の良

第2表　陸士入学中国人留学生数　－1900年～1913年－

期別	入学年月	卒業年月	在学期間	人数	各科別人数				
					歩兵	騎兵	砲兵	工兵	輜重
1	1900年6月	1901年11月	1年半	40	22	4	9	5	
2	1901年6月	1902年11月	〃	25	16	2	4	3	
3	1903年6月	1904年11月	〃	95	51	12	12	16	4
4	1906年6月	1908年11月	2年半	83	37	14	20	9	3
5	1907年1月	1908年11月	約2年	58	23	8	11	12	4
6	1907年6月	1908年11月	1年半	199	111	23	40	17	6
7	1908年4月	1910年5月	2　年	55	28	10	12	5	
8	1909年6月	1911年5月	〃	55	28	10	12	5	
9	1910年6月	1911年11月	1年半	37	29	6	1	1	
10	1913年6月	1915年5月	2　年	36	13	18	2	3	

（出所）田久川「日本陸軍士官学校与該校中国留学生」（『中日関係史論叢』第一輯，1982年，北京）

粥らは辛亥革命に最後まで反対，抵抗したからである。鉄良は大臣を歴任し，良粥は孫文らの第一次蜂起の鎮圧を指揮している。ちなみに，1911年，清朝は倒壊するが，中国政府による陸士への留学生派遣は民国になって以後も新政府のもと行なわれ，それは1936年，日中全面戦争開始の直前まで続けられた。[29)]

このように見てきたとき，この時期，同じく留学生といっても，大別して，1）革命派（反体制派），2）体制派があったのであり，それに立身出世を目途とするグループを加えて3つの種類に分別することが出来るのであるが，しかし，立場・思想・方法の違いはあっても，彼らが一様に日本からその近代化のありようを学び，それを中国に移植し，富強の具にしょうとした点では共通しており，20世紀初頭の10余年間が，歴史上未曾有の日中蜜月の時代であったことは，否定出来ないと思う。

日本から服部宇之吉を始め多数の優れた学者・教育者が，顧問・教習の形で中国に赴き，中国の教育，学術の改革と発展のために貢献を惜しまなかったのも，この時期である。最初に中国からの留学生を受け入れた東京高等師範の嘉納治五郎や宏文学院留学生担当日本語教師松本亀次郎らは，今でも中国で「中国留学生の父」として尊敬され，記念されている。なお，この期の留学生予備教育（日本語教育）を実施していた主な教育機関としては，前記東京高等師範学校以外につぎのようなものが挙げられる。[30)]

宏（弘）文学院，成城学校，日華学堂，東亜商業学校（清華学校），実践女学校，成女学校，東亜同文書院，振武学校，法政大学速成科，経緯学堂（明治大学経営），早稲田大学清国留学生部。

Ⅳ　日本の拡張政策と留学生の対日不信

それでは，20世紀初頭（中国においては，清末）のこの時期，「日本から学ぶ」というこの大きな国民的運動をとおして，中国人の日本観は，それ以前に比して本当に変わったのであろうか。「日本から学ぶ」というが，何をどのように学んだのであろうか。また，近代日本の隆盛をただ盲目的に賛美し，そこに何らの疑問も感じなかったのであろうか。

問題の焦点はこれであって，結論から言えば，中国人の対日観はこうした風潮の中にあっても，本質的には変わらなかったということである。確かに，すでに見てきたように，中国は日本の教育制度，文物を輸入した。留学生個々人にしても，日本を評価し，維新の成果に感嘆している。だが，それは「日本だから」というのではなく，欧米の文化・技術の代替物として，そうであったに過ぎない。言い替えれば，日本の学術・文化・教育，ならびに政治制度を含めて，その価値を絶対化して認めたというのではなかったことである。

間違ってならないのはこの点であり，留学生らは日本の生活に馴れ，日本文化を知るにつけ，日本は「欧米の二番煎じ」「欧米より劣ったもの」と意識するようになっていったからである。前記張之洞が日本留学の必要性を説いたさきの文章に続けて，「若自欲求精求備再赴西洋有何不可」（自ら精を求め備を求めんと欲すれば，再び西洋に赴いて何ぞ不可あらん）と敷衍しているのは，そのことを示している。この意味は，本当の学問，技術を身につけようと思えば日本では不十分で，さらに学ぼうと思う者は欧米に行くべきであり，日本は当面の間に合わせなのだ，と言うのである。

この立場は，梁啓超においても同様であり，亡命生活が長引くにつれ，梁は次第に日本への失

望，反日感情をつのらせている。彼はその「富国強兵」なる一文において，世界を1）貧国弱兵，2）貧国強兵，3）富国弱兵，4）富国強兵の4つの国家群に分類し，日本を「貧国強兵」と規定したからである[31]。「貧国強兵」なる言葉には，兵こと強いが国力は貧弱で，資源に乏しく実力はさしてあるわけではないという意がこめられている。

こうした意識は，革命派の留学生においても顕著に現れており，これもすでに述べた章炳麟をして，つぎのように言わしめている。

「日本の文明には，一つでも自分から生み出したものがあるだろうか。学術は言うに及ばず，生活必需品についてもそうである。日本人は『文化の高いものは，必らず砂糖の摂取量が多く，また必らず椅子に坐る』と言っているが，考えてみると，砂糖及びその製法はもともとインドから中国に伝わり，のち日本に渡ったものである。机や椅子の使用に至っては，中国はすでに1000余年にわたってこれを行ない，どんな田舎に行っても使っている。文化の高下というものは，もとより国の盛衰興廃によって決まるものではない。いまヨーロッパ人には日本人に巧言を言うものが多いが，少し知識のあるものなら，中国を貴しとなすべきことを知っている。印刷・羅針盤・鉄砲の技術はことごとく中国からヨーロッパに伝えられたものであって，日本にはなかった」[32]

これは革命派の機関紙『民報』に載ったものであるが，「インド人の日本観」と題しながら，その実，彼らの内面を遺憾なく吐露したものであることに注目する必要があろう。彼らは日本を知れば知るほど，この国が信頼に価いするものでないことを看取したのであった。

では，彼らをしてこう思わせた原因は何なのか。それは第一に，陳天華の絶命を惹起した日本政府の留学生政策の転換であり，「取締規則」に反対して行動を起した留学生たちを「放縦卑劣」と見なした日本の世論であろう。彼らは日本が清朝政府と結託して中国の近代化に反対している，と見たのである。第二に，体制派について言えば，前述した中華思想に由来する日本観が本質的に変化しなかったことが考えられるが，改良派，革命派の場合，日露戦争が「ロシアに代わる日本のアジアへの野心」として，しだいに警戒心をもって受け止められてきたことから生じたものであろう。そして事実，後者の杞憂が現実になったことは，日露戦争後の日本の朝鮮植民地化とこれに続く満州進出の公然化によく現れており，辛亥革命前後の日本のたび重なる中国干渉が，やがて山東出兵を経てついに「対華21カ条要求」になっていく過程を見れば，よく分かると思う。「取締規則」と「日本のアジアへの野心」，その相関関係について，陳天華はつぎのように述べている。

「さいきん，かの国の文部省が清国留学生取締規則を発布したのは，われわれの自由をはぎとり，わが国の主権をおかしたこと，いうまでもないことである。……日本の各新聞は，われわれを烏合の衆だとののしり，あるいはあざけり，あるいはあてこすり，ひどいものである。朝日新聞などは，ずけずけと“放縦卑劣”だとののしり，われわれをば，とことん軽蔑している。ぼくは，このことばに心をいためる。……日本は同文同種たるアジアの国とは同盟せず，同文同種でないイギリスと同盟している。中国と日本では，利害関係は同じといえようが，実力はどうも等しくない。そこで同盟という名前はあっても，実際は保護ということになる。だから，こんにち日本と同盟しようというのは，朝鮮のようになることを意味し，こんにち日本と離れようとするのは，東亜をほろぼすことになる」[33]

陳天華はこう言い，日本のアジアにおける覇権を阻止するのは中国をおいてなく，それゆえ，中国の民族的自覚と自強が何よりも必要であり，留学生が“放縦卑劣”とののしられることのな

い自立的精神を確立してほしい，と結んでいる。まさに血涙をもって書かれた日本批判であり，民族への遺書であろう。

また，さきの章炳麟はこうも書いている。

「日本がまだ盛んにならない頃，アジアの諸国には常に小さい争いはあったが，なお平和というべきであった。しかし，いまやそうではない。あのトルコはアジアにおいて暴虐で徳がなかったが，しかし，アジアの大勢をかき乱すようなことはできなかった。白人を引き入れ，同類を侮った者は誰か！」[34]

日本への不信，その極に達したというべきであろう。第1表に示したとおり，1906年以降，日本への留学が急速に下降線をたどるのは，以上の理由にもとずく。しかし，日本文部省の高官は，平然とこう語ったのである。

「留学生中，革命派に属する者多く此等は慥かに今回の省令によりて大打撃を蒙りたるに相違なく……」[35]，と。

「取締規則」の目的が中国革命＝変革の阻止と受け取られても仕方のない発言であろう。

ちなみに，重ねて言えば，この時期の留学生教育は日本語教育を主軸とした速成教育であり，水準が必ずしも高くなかったことは，つぎに示す宏文学院のカリキュラムによく現れており，[36] 内容は中学上級程度だったと言われ，これらのことも留学生の不満を買っていたと思われる。

第1学年：

修身，日語，與地歴史，理科示教，体操

第2学年：

修身，日語，輿地歴史，算学，幾何学，理化学，図画，体操

第3学年第一部

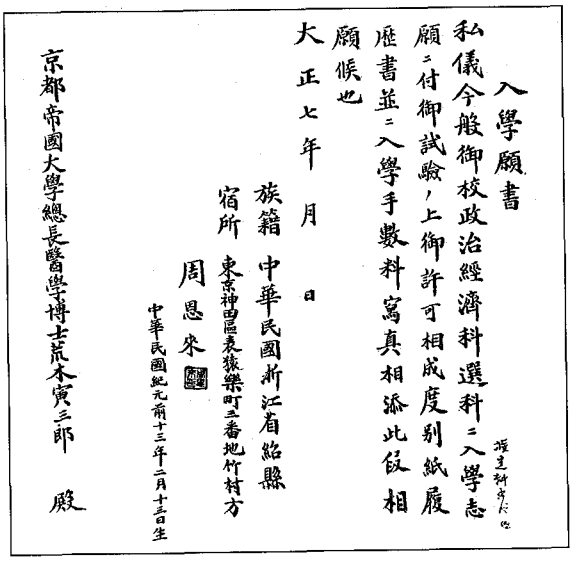
修身，日語，三角術，歴史及世界大勢，動物学，英語，体操

第3学年第二部

修身，日語，幾何学，代数学，三角術，理化学，動物学，植物学，図画，英語，体操

参考までに，既述の周恩來の入学願書のコピーを下記に掲げておく[37]。

周恩來（元中国総理）の入学願書


入學願書

私儀今般御校政治經濟科選科ニ入學志願ニ付御試驗ノ上御許可相成度別紙履歴書並ニ入學手數料寫真相添此段相願候也

大正七年　月　日

族籍　中華民國浙江省紹縣

宿所　東京神田區表猿樂町三番地竹村方

周恩來

中華民國紀元前十三年二月十三日生

京都帝國大學總長醫學博士荒木寅三郎　殿

（愛媛大学・松野尾裕氏提供）

エピローグ

さて以上，日清修好条規に始まり日清戦争，日露戦争を経て辛亥革命に至る時期，つまり20世紀初頭における日中関係の様態と，その過程で生起した中国の日本観，対日態度の特質について，主として留学生の動態を中心として概観してきた。

この概観から判明したことは，第一に，日清戦争に敗北するまで，中国は明治維新以後の近代日本に対する関心が殆どなく，あったとしても中華思想に由来する蔑視と反感，そして疑惑が主流を占めており，黄遵憲のごとき人物は例外であったということであった。これは中国人が自己の文化伝統の重みのゆえに他に対して閉鎖的である傾向が強いことを示すものであるが，同時に，アヘン戦争以来の欧米の進出が半植民地化をもたらしたことからくる対外警戒心が，そうさせたものであろう。

日清戦争はそうしたタブーを破ったわけであり，その結果，中国は日本に開眼，以後，日本に対する認識は是正され，その対日態度は大きく変化していった。20世紀初頭の日本留学熱の高まりはそのことを裏付けており，膨大な数の留学生が日本へ殺到した。彼らは日本を通して「近代」の何物かを知り，それを自国の富強化に役立たせようとしたのである。彼らが日本の詰襟学生服を“革命服”と称したという挿話には，彼らの自国の近代化＝富強化にかけた切々たる熱情がこめられていたと思う。

しかるに，日本政府の対応は「清国留学生取締規則」の公布に見られるように，当初の精神を失い，清朝政府の要請があったとはいえ，留学生の自由な発展を阻害し，抗議の自殺者まで出し，日本への不信を増大させる方向へと転じてしまった。「取締規則」の発効後，彼らが大挙して帰国するのはそのためであり，以後，来日留学生数は低迷の一途をたどる。しかも，留学生教育の内容が予備教育にとどまり，専門教育に及ばなかったために，この期の帰国者がどれだけ母国の発展に寄与出来たかも，不鮮明のままである（筆者はこの期の留学生の追跡調査を行なったことがあるが，何らの成果も得られなかった）。問題の第二はこれであって，当時の日本に本当に留学生を温かく受け入れ，真摯に教育し得る器量と環境があったのか，ということであろう。

もし，それがないままに戦争（日清戦争）の勝者として，敗者に同情し，勝者のプライドを誇示するためだけに，これを行なったとするならば，それは中国の発展とは無関係であったと言わねばならない。そして，この仮説がそれほど間違っていないと思うのは，留学生受け入れに当って，当時，早稲田大学清国留学生部教務主任であった青柳篤恒が「一人の支那青年を多く養成するは，日本の勢力を一歩支那大陸に進むる所以の大計たる」[38]と高言していることで明らかであろう。勝者の誇示にとどまらず，中国進出（正しくは侵略）への足掛かりを留学生に求めたということになる。日本に希望を托し来日した留学生がおしなべて反日感情を抱いて帰国するには，それだけの理由があったということになる。

歴史はくり返す，と言う。いま，往時を思い，現在を見るに，留学生受け入れに関する日本の対応は，その本質において100年前と少しも変わらない。「留学生受け入れ10万人計画」は良し，しかし，その実質は生活面，学習面において，彼らを満足させ，真の日本理解者を育てているだろうか，また，相手の立場を尊重した相互理解が本当に進んでいるだろうか，“経済大国”を誇示する施策のみが先行し，心のこもらない言葉だけの国際交流で終っているのではないのか，沈思して考えるべき課題であろう。

最後に，本稿では紙数の関係で1920年代に入っての留学生運動の新しい展開に触れることが出

来なかった。1920年代，アメリカの留学生受け入れの積極化にともなって，日本はこれとの競合上，留学生政策を転換せざるを得なくなり，20年代後半から30年代にかけて留学生の来日が再び活発化し，それが以後の日中関係に重大な影響を与える因になるのであるが，これらの解明は他日を期したい。

なお，留学生派遣開始（日本にとっては，受け入れ）100周年に際して，中国では日本研究・日中関係研究諸団体がこぞって，これを記念する大規模かつ真摯な研究・検討会を開催したが，日本では東京，広島，福岡等で在日留学生団体が記念集会を開いたのみで，政府はもちろん，関係学会においてすら何一つそのような動きはなかった。歴史に対する彼我の認識の相違が良く現れていると思う。

注

1）林子勛『中国留学教育史』（一八四七年至一九七五年），1976年1月，台北，120ページ.
2）上田萬年「清国留学生に就きて」（『太陽』第四巻，第十七號）.
3）前掲『中国留学教育史』，120ページ.
4）柳原前光は正式には二代目の公使である．初代山田顯義は任命されながら赴任せず，他の部署に配置換えされたからである.
5）この期の日本蔑視，攻日論の実態については，佐藤三郎「明治維新以後日清戦争以前における支那人の日本研究」（『歴史学研究』10－11，1940年11月）及び鈴木俊「中国人の日本観の変遷」（中国研究所編『中国の日本観』，1948年2月）に詳しい.
6）『日本近事記』『日本雑記』については，小島晋治・光岡玄他編『中国人の日本観100年史』（1974年6月）に抄訳があり，本稿ではこれを参照した.
7）張之洞「日本商務可允球案宜緩摺－光緒六年十月初一日」（『張文襄公全集』一）.
8）黄遵憲については前掲佐藤論文，及び実藤恵秀・豊田穣訳『日本雑事詩』（東洋文庫111，1968年3月）の解説が詳しく，中国人の研究では王暁秋「黄遵憲《日本国志初探》」（北京市中日文化交流史研究会編『中日文化交流史研究論文集』，1982年10月）がある.
9）『日本国志』巻四十，工芸志.
10）同上巻三十二，学術志一．いずれも前掲佐藤論文中の訳文を借用.
11）前掲『日本雑事詩』，28，30～31，92の各ページ.
12）譚汝謙主編『中国訳日本書総合目録』（香港・中文大学，1980年），及び陳応年「近代日本思想家著作在清末中国介紹和伝播」（前掲『中日文化交流史論文集』）を参照．但し，前者は完全に網羅したとは言えず，不備が目立つ.
13）『日本国志』巻三十二，学術志一.
14）日清戦争の歴史的意義，及びその問題性については，拙稿「甲午戦争一百周年的思考」（復旦大学日本研究中心『日本研究集刊』，1994年2期）に詳しい.
15）趙建民「惨敗のなかで目覚めた中国－中国はなぜ日本に留学生を派遣したか－」（月刊『状況と主体』No. 226，1994年10月号）.
16）康有為『日本変政考』序．『日本変政考』は初め『日本変政記』として著わされたものであるが，光緒24年に徳宗に上程された段階で『変政考』と改変された．長い間，原文の所在が不明であり，その内容も不詳であったが，1947年，米国人ライト氏が，北京で康の家族が保管していた稿本を発見したと言われ，その後，黄彰健氏によって『康有為戊戌真奏議』（1974年，台北）として発表された.
17）梁啓超「論学日本之益」（『飲冰室文集』第一冊，81～82ページ）.
18）同　上「論学術之勢力左右世界」（『飲冰室専集』第三冊，115～116ページ）.
19）同　上「戊戌政変記」（『飲冰室専集』第三冊，109ページ）.
20）張之洞「勧学篇」下，外篇遊学第二（『張文襄全集』六）.
21）譚汝謙編前掲書より選別.
22）さねとう　けいしゅう『中国留学生史談』，1981年，104ページ.

23）24）25）いずれも前掲光岡他編著による．
26）「中国同盟会誓辞」，（『辛亥革命資料集』第一巻，所収）．
27）「清国留学生取締規則」は全15条から成っており，正式名称は「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規定」であり，明治39年（1906）年1月1日より「施行」とある．
28）秋瑾の帰国前後の事情については「敬告我同胞」（『秋瑾集』，1960年，上海，29ページ），及び方積根他『秋瑾』（1982年北京）を参照．離愁の詩は陳舜臣氏の訳による（同氏『中国の歴史』第14巻，184～185ページ）．
29）後の国民党の指導者となった蒋介石，張群等の将軍は初期の陸士留学生であり，帰国後，陸士に倣って広州に軍官学校を設立した．中国人陸士留学生の歴史については，田久川「日本陸軍士官学校与該校中国留学生」（東北地区中日関係史研究会編『中日関係史論叢』，1982年）が詳しい．
30）さねとう前掲書193～217ページ．
31）前掲『飲冰室文集』第三冊，80ページ．
32）34）いずれも前掲『中国人の日本観100年史』所収の訳文を借用．
33）「絶命書」の全文は，さねとう前掲書に収録されている．
35）これは当時の文部省木場次官の発言である（明治38年12月15日付読売新聞）．
36）さねとう前掲書208ページ．
37）周恩來は大正6年（1917）に来日し，しばし京都に滞在した。この願書は，その際に京都大学に提出したものであるが，彼は手続きをしたのみで入学をしていない。この理由は，日本の「対華21ヵ条」要求に反発したからだと言われており，彼はまもなく帰国し天津において日本に抗議する〝五四運動〟に参加したあと，フランスに留学している。
38）青柳の発言は「支那人教育と日米独間の国際競争」と題され，『外交時報』（第122号）に掲載されている．『外交時報』は外務省の広報誌の一つであるから（現在もそうである），これは日本の外交姿勢を代弁したものと言えよう．

（1996年9月30日受理）